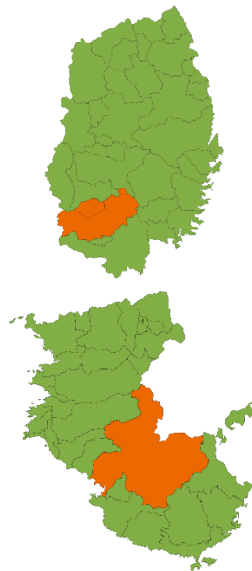


# 岩手県胆江地方および和歌山県

## 農村ワーキングホリデーを活用した都市農村交流の「鏡効果」と農村再生手法としての可能性の検証

(申請タイプ)



### 【地域の基礎データ】

人口：130,915 人（胆江地方／令和 2 年 3 月末現在）

68,844 人（田辺市／令和 3 年 10 月 1 日現在）

高齢化率：31.9%（胆江地方／平成 27 年 1 月 1 日現在）

33.2%（田辺市／令和 3 年 1 月 1 日現在）

産業：農業（稲作、畜産） など（胆江地方）

農業、漁業、林業 など（田辺市）

### 【活動の基本情報】

参加学生数：21 名（1 回生：2 名、2 回生：8 名、  
3 回生：8 名、4 回生：3 名）

活動期間：平成 26 年 6 月～

担当教員：藤田武弘

### 1. 活動実施の経緯

「農村ワーキングホリデー」は、農業や農村に関心をもつ都市住民が、繁忙期の農作業を無償で手伝う代わりに農家から寝食の提供を受けるというもので、参加者と農家との深い交流を特徴とする“日本型グリーン・ツーリズム”のなかでも、最も「鏡効果（他者との交流を通じてみた日常生活に潜む価値への気づき等）」の高い取り組みである。学生を参加者とする域学連携型の農村ワーキングホリデーは、次世代の若者たちが、農業・農村が直面する地域課題を当事者意識をもって理解する機会を提供するとともに、多世代間の交流による「鏡効果」により地域のコミュニティが活性化するなどの変化が期待されている。

### 2. 活動の内容

今年度、岩手プログラムについては、当初段階から現地での活動実施やセミナー開催等の通常行事を見送ったために、ほとんど活動はできなかった。

ただし、和歌山プログラム（田辺市）については、事前学習会の開催（オンライン）に加えて、昨年度に引き続き現地でのみかんの収穫作業時期に合わせて、宿泊施設から各農園に通い作業に赴く形での「泊業分離型」のワーキングホリデーを学部の LIP 活動ガイドラインに準拠した形で実施した（2泊3日）。

### 3. 活動を通じて

昨年度に引き続いて、コロナ禍のもとでの実施により通常の対面による活動ができなかった（または、「泊業分離」のため農家との交流が極めて限定された）ことから、通常期待される交流による「鏡効果」の検証作業を行うことは難しかった。ただし、昨年度からの連続参加者も半数程度含まれていたことから、限られた意見交換等の機会ではあったものの、貴重な交流機会となったと考えられる。オンラインでの活動は、事前・事後学習の機会としては有効であり、対面活動復活後のハイブリッド型の取り組みにも活かせる成果を得たと考えている。

#### 4. 成果物（ポスター）

## 農村ワーキングホリデーLIP

参加学生：21名（4年3名、3年8名、2年8名、1年2名）  
指導教員：藤田武弘 学生事務局：家口直己、藤井優希

### 農村ワーキングホリデーとは？

- 都市農村交流の形態のひとつ
- 農業や農村に関心のある都市住民が受入農家のもとで農作業に従事し、その対価として寝食の提供を受ける
- 参加者と受入農家の交流が生まれる  
↓  
都市住民の農業への理解促進  
農業の労働力不足の解消

### 活動目的

- 農村再生手法としての農村WHの可能性について検証する
- 都市農村交流を通じた「関係人口」づくりの効果について考える
- 農業・農村の実情に触れることで当事者意識を持つ

### 例年の主な活動

- 和歌山県かつらぎ町（6・8月 各2泊3日）
  - ・ぶどう栽培、収穫
  - ・観光農園での接客・販売など
- 岩手県胆江地方（9月 3泊4日 or 4泊5日）
  - ・稲刈り
  - ・野菜の収穫
  - ・畜産など

コロナの影響

### 今年度の活動

- 和歌山県田辺市（12月 2泊3日）
  - ・オンライン事前講義
  - ・みかんなどの柑橘、柿の収穫
  - ・収穫した果実の選果
  - ・箱詰め、出荷作業など

### 参加学生の学び

- 農作業体験や受入農家との交流を通じて農業のやりがいや苦勞を学んだ
- 担い手の高齢化や後継者不足などの農業・農村の課題を実感した



### 今後の取り組み

- 受入農家や地域との関係を大切に、今後も積極的に農村に赴いて農作業支援を行う
- 都市農村交流の活性化に向けて農村WHの取り組みを広める
- 他の地域の農村WHにも参加する
- 活動を通じて得た経験や学びを大学生生活の諸活動にも活かす

